

## 小学生における仲間集団（ギャンググループ）形成の特徴とその役割

The characteristic and its role of peer group in school age "gang group"

滝口 美樹\*  
Miki TAKIGUCHI

吉川 はる奈\*\*  
Haruna YOSHIKAWA

**【概要】** 小学校中学年の仲間集団の特徴と変化に着目し、特にギャンググループの形成過程を明らかにすることで、ギャンググループが仲間関係にどのような役割を果たしているのか考察した。小学校での観察調査と質問紙調査の結果、中学年の時期には、仲間集団は取りくみたい遊びを理由に形成する状態から、固定された仲間との同一行動を求めていくように変化していった。さらに高学年にかけて、仲間関係が広がっていき、学校生活の中で「楽しい」時間は「休み時間以外」と答える児童がふえるなど、学習、行事等で友達と一緒に活動することで楽しさを感じていた。

**【キーワード】** ギャンググループ、小学生、仲間関係、形成過程

### 【問題と目的】

人が人生をよりよく生きるためには、仲間と有意義な対人関係を築くことは必要不可欠であるといわれる。また仲間関係は、さまざまな社会的行動の発達に必要な文脈を作り出すことができると言われている(氏森・清水、2002)。そのなかで、ギャンググループとは、小学校3～4年、児童期中期から児童期後期にかけてみられる特徴的な仲間関係のことであり、その時期のことをギャングエイジと言う。ギャンググループの特徴は、同性の同年齢児で構成され、排他性・閉鎖性が強いといわれる。また同一行動による一体感が重視されること、力関係による役割分化がみられること、グループメンバーと強く結び付くことで親から自立しようとする際に生じる不安を和らげる特徴をもつ。ギャンググループでの活動を通して、適切な自己主張の方法や、ルールを守るなどの、社会生活に必要なさまざまなスキルや知識が習得されるとの指摘もある(國枝・古橋、2006)。しかしその一方で、現代では核家族化、少子化が進み、塾や習い事による遊ぶ時間の減少、都市化に伴う遊び空間の喪失、テレビゲームの普及など、子どもを取り巻く環境の変化によって、地域の仲間集団は解体され、ギャンググループは消滅したという報告もある(西村、2007)。それによって現代の子どもたちは、昔の子どもが仲間集団のなかで学んだことが学ばなくなってきたと言われており(深谷、1989)、仲間関係の形成、発展に大きな困難を抱える子どもが多いと言われている(小石、1995)。

そこで本研究では、児童の仲間集団形成の特徴と変化

に着目し、現代の児童の仲間関係にギャンググループがどのような役割を果たしているか考察する。

### ＜研究1＞小学校3年生の仲間集団の形成過程

#### 【方法】

1. 調査対象：S市立C小学校の児童3年生、計35名
2. 調査方法：参与観察法。観察の様子はその場で簡単なメモを取り、観察終了後、フィールドノートに記述した。
3. 観察期間：平成24年5月～平成24年11月（週1回朝8時～午後3時、計19回）

#### 【結果および考察】

##### 1. 仲間集団の形成過程

###### ・観察前期(5月～6月)：遊びを理由に形成する仲間集団

観察前期での子どもたちは、「やりたい遊び」を理由にして仲間集団を形成していた。自分が「その遊びをやりたい！」と思うと、「仲間に入れて！」と主張し、仲間に加わっていく様子が観察された。仲間集団の構成については、クラスの仲間同士で性別関係なく集団をつくっていた。4、5人で、教室内でお絵かきをしたり、15人前後で、校庭で鬼ごっこをしたりなど、遊びの種類によって集団の人数は異なっていた。ここでは、「やりたいこと」を優先しているため、自分がその遊びをやりたいなくなると、遊びの途中でも集団から抜けてしまう児童もいた。このように、児童はこの遊びで「遊ぶ」という目的だけ

\* さいたま市立大宮東中学校

\*\* 家政教育講座

のために集まり、継続性のない仲間集団を形成していた。

・観察中期（7月）：「好きな遊びが同じ」仲間と形成する仲間集団

仲間と関わり合うなかでお互いの好きな遊びや趣味を理解することにより、好きな遊びやスポーツが同じである仲間と集団を形成するようになり、観察前期と比較して継続的に同じ仲間と関わる児童が出てきた。

一方で、一緒によく遊ぶ仲間同士で、ぶつかり合うことが多くなった。このことから、仲間と近づくにつれて、児童は仲間とぶつかることが多くなるが、それにより嫌な気持ちになったり、相手を傷つけてしまったりした経験を通じて、仲間集団のなかでのルールや適切な自己主張の仕方を学び、継続した仲間集団を形成していくと考えられた。

・観察後期（9月）：同性の固定された仲間と同一行動

観察後期は、同性のみで好きな遊びや気の合う児童同士と仲間集団をつくる児童が多くなった。仲間集団内のメンバーはほとんど固定されたものとなり、その固定された仲間と同一行動をして、学校生活を過ごす児童が増えていった。観察前期と比較すると、児童は「やりたい遊び」ではなく、「仲間との同一行動」を目的として、仲間集団を形成していることがうかがわれた。これらの過程、変化を経て、対象とした3年生は、従来のギャンググループの特徴と似たような仲間集団を形成していったといえる。児童は、楽しそうに、誇らしそうに行う仲間との同一行動を通じて、対人関係におけるさまざまなスキルを身につける機会を得ていると考えられ、仲間との絆はさらに深まり、児童のなかで仲間という存在は大きく、大切なものになっていくことが示唆された。

2. 仲間集団の構成人数の変化

観察前期5月頃は、性別に関係なく、15人前後で構成されていた。クラスの大 half で遊ぶということが多かった。後半9月頃からは、男女ともに、同性のみで仲間集団をつくり、仲間集団も固定されていった。人数は男子は4～8人、女子は2～4人程度だった。

また、学校内では、他の学年の友達と遊ぶことはほとんどなく、男女ともにクラスの友だちと遊ぶことがほとんどだった。一方、放課後は、男子には、クラスの友達だけでなく、おなじスポーツチームに所属している仲間と遊ぶことがあり、その中には異年齢のメンバーが加わっていることもみられた。

3. 仲間集団内での意見の衝突

観察前期の5月頃は、取りくみたい遊びを理由に集まっているので、意見のぶつかり合いは少ない。しかし観察中期の7月頃になると、仲間との自己主張のぶつかり合いが多くみられた。

内容は「鬼ごっこの鬼はやりたくない」「片づけはしたくない」など、さまざまで、仲間の考えを優先しあう様子はみられず、ぶつかりあった仲間をしばらく避ける行動もみられた。観察後期の9月頃には、「@（仲間の名前）が遊ばないなら、自分もその友達と遊ばない」「付き添いでついていく」など仲間の判断や行動に合わせて同一行動をとることが目立つようになった。

4. 仲間集団での仲間関係の深まり

仲間同士で相互に関わりを持つことを楽しんでいる様子がみられた。児童同士が「自分たちは仲良しだ」と相互に思っていることが相互に伝わり、仲間同士の親密さを感じる。「仲間と遊んで楽しかった」、「仲間といるとうれしくなる」という経験をおして、友達の存在が大きくなっていく。

5. 排他性、閉鎖性

観察前期の5月頃は固定された仲間集団ではなく、やりたい遊びを決めて遊んでおり、「仲間に入れて」と新たに児童が参加しようとする際も、拒むことはなく一緒に遊んでいた。後期になると、仲間は固定化されていったが、「入れて」と参加を要求されると、拒むことはあまりみられなかった。しかし、所属する仲間集団のメンバーに対する態度と、他の児童に対する態度が大きく異なる児童もいて、場合によっては、排他性を持つよう変化していく可能性もあることがうかがわれた。

<研究2> 小学校高学年における仲間集団の発達的变化

【方法】

1. 調査対象：S市立C小学校の3年生164名、4年生142名、5年生148名の計454名
2. 調査方法：小学校高学年における仲間集団の構成や友だちに対する意識に関する発達的变化について自記入式質問紙調査を実施した。  
具体的な内容は、仲間集団の構成について6問（仲の良い友達の数、理由、性別、学年、集団内でのメンバー変化の有無など）、仲間集団の存在の認識、遊び場面での活動4問（平日の過ごし方、休日の過ごし方など）、仲間に対する気持ち、自由記述（学校で楽しさを感じること）
3. 調査期間：平成24年11月上旬
4. 分析方法：SPSS PASW Statistics 18を用いて統計処理を行った。

【結果および考察】

1. 親よりも仲間との時間を優先する

友だちを選ぶ理由において、学年で有意差が認められた。「家が近い」と回答した児童の割合は、学年が上がるにつれて低くなり、3年生では10.1%、5年生では17.1%

となった。また、「性格が合う」と回答した児童の割合は学年が上がるにつれて高くなり、5年生では25.0%と、3年生よりも10%ポイント以上高かった。このことから、学年が上がるとともに友だちを選ぶ理由が変化し、家や席などの物理的な近さから、性格や価値観など仲間の内面的な部分を重要視するようになると考えられた(図1)。

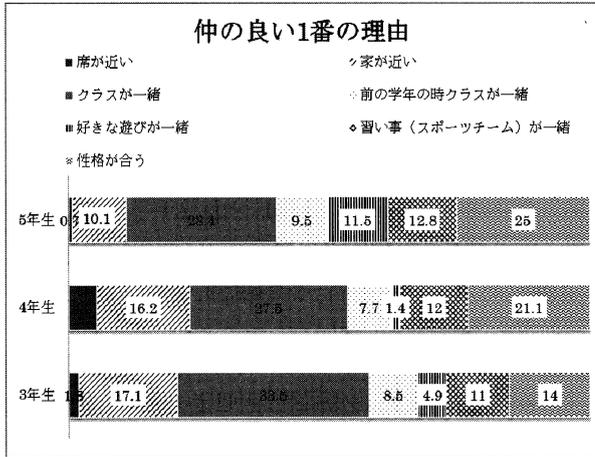


図1 「仲の良い一番の理由」の学年比較

また、休日の遊び場面での過ごし方において、「なかよしな友だち」と過ごす割合は学年が上がるにつれて高くなり、5年生では41%と3年生よりも10%以上高かった。一方で、「きょうだい」や「父母」などの「友だち以外」の相手と答えた児童の割合は、3年生が42%であり、5年生よりも20%ほど高くなった。このことから、学年が上がるにつれて、親よりも仲間との関係を重視するようになると考えられた。

## 2. 仲間関係が広がり、結びつきが弱まる

仲間集団の存在があると回答するのは、3年生は50%、4年生は62.7%をしめるが、5年生になると25.7%と大きく減少した(図2)。

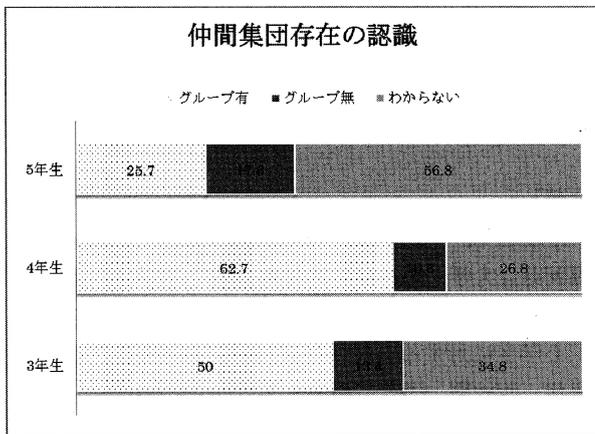


図2 仲間集団存在の認識 学年比較

また男女比では、女子は53.1%男子が39.7%となり仲間集団の存在があると回答する者は男子の方が少なかった(図3)。仲間集団内のメンバーの入れ替わりの有無では、学年で負の相関がみられた。メンバーの入れ替わりが「よくある」という回答の割合が最も高かったのは5年生の14.4%であり、4年生の4倍以上を示した。したがって5年生では、下級生よりも友だちの幅が広がり、いくつかの仲間集団に所属することに伴って、一つ一つの集団内のメンバーの結びつきが弱まっているのではないかと考えられた。

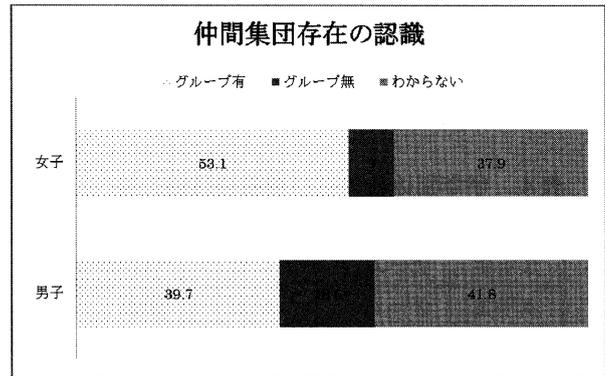


図3 仲間集団存在の認識 男女比較

## 3. 平日、休日の遊びの内容

平日は3,4年生はゲームで過ごし、5年生はサッカーをすると回答する者が最も多かったが、休日には、いずれの学年もはゲームをして過ごす割合が最も多かった(表1～表4)。

表1. 5年生の平日の遊び場面での活動

活動	人数
サッカー	77
ゲーム	65
おにごっこ	64
おしゃべり	37
テレビ	24
読書	16
公園の遊具	13
何もしない	12
野球	11
お絵かき	9
その他	26

(複数回答)

表2. 学年別平日の遊び場面での活動上位

	1位	2位	3位
3年生	ゲーム	おにごっこ	おしゃべり
4年生	ゲーム	おにごっこ	おしゃべり
5年生	サッカー	ゲーム	おにごっこ

表3. 5年生の休日の遊び場面での活動

活動	人数
ゲーム	78
テレビ	54
サッカー	46
おしゃべり	33
おにごっこ	30
読書	29
公園の遊具	15
お絵かき	13
野球	13
何もしない	9
その他	27

(複数回答)

表4. 学年別休日の遊び場面の活動上位

	1位	2位	3位
3年生	ゲーム	テレビ	サッカー
4年生	ゲーム	テレビ	読書
5年生	ゲーム	テレビ	サッカー

#### 4. 「楽しい」と感じる内容が変化する

児童に、学校生活のなかで楽しさを感じるの、いつ、だれと、どんなことをしている時であるのか、と質問したところ、「休み時間の遊び」、「クラス内行事」、「学年行事」、「学校行事」、「授業の活動」、「学校の日課」、「学校の活動」、「一人での活動」の8つが挙げられた。

表5. 児童が「楽しい」と感じること（3年生）

内訳	人数	回答例
休み時間の遊び	129人	「クラスの友だちと昼休み、サッカーをしたこと」、「なかよしい友だちと給食のときおしゃべりをしたこと」
クラス内行事	17人	「クラスの先生とクラスのみならず、ハロウィンパーティをしたこと」
学年行事	1人	「3年生全員と社会科見学をしたこと」
授業の活動	5人	「Kさんと算数の時間に距離を計ったこと」、「みんなと5時間目に音楽の授業をしたこと」
学校の日課	5人	「友だちと掃除の時間にいっぱいごみをとったこと」、「友だちとお昼に給食を食べたこと」
一人での活動	3人	「一人で25分やすみにぼうっとしたこと」

表6. 児童が「楽しい」と感じること（5年生）

内訳	人数	回答例
休み時間の遊び	60人	「友だちと25分休みにおしゃべりをしたこと」、「友だちと休み時間にウノをしたこと」
クラス内行事	34人	「クラスのみならずとハロウィンパーティをしたこと」
学年行事	33人	「Sブロンコスチームと3時間目にバスケットボールをしたこと」
授業の活動	16人	「みんなと体育で走り幅とびをしたこと」、「みんなと3、4時間目理科の実験をしたこと」
学校の日課	2人	「Iさんと保健委員会をしたこと」、「生物係の人とザリガニの掃除をしたこと」

「休み時間の遊び」と回答した児童の割合は、学年が上がるにつれて低くなり、3年生が80%で、最も高かった。このことから、学年が上がるとともに休み時間以外の活動に「楽しさ」を感じる児童が増え、興味や関心が学習や学校生活全体に広がっていくことがわかった（表5、表6）。

また、「だれと」過ごしているかの部分では、「一人での活動」と答えた児童以外は「友だち」と回答していた。このことから、友だちと一緒に活動をすることによって楽しさを感じる児童が多いということがわかった。友だちは、児童にとって「楽しさ」を倍増させてくれる、大切な存在であることが考えられた。

#### 【まとめ】

中学年の児童は、発達に伴い仲間と強く結び付き、同一行動を楽しむようになっていった。子どもたちは、仲間と継続した関係をもつことにより、さまざまな対人的スキルを獲得する機会を得るようになってきたと考えられた。また、学年が上がるにつれて親よりも友だちとの関係を重視し、友だちの幅は広がっていくが、仲間関係は深くならず、希薄化してしまっていることや、「楽しい」と感じる内容が広がることが示唆された。

#### 【文献】

- 1) 児童期における友人関係の発達。國枝幹子・古橋啓介。福岡県立大学人間社会学部紀要、Vol. 15, No. 1. 105-118. 2006年
- 2) 小学生に対する心理教育グループの課題、デザイン、実践。西村馨。国際基督教大学
- 3) 人間関係の発達心理学3「児童期の人間関係」。小石寛文。培風館。1995年
- 4) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在。住田正樹・南博文・福留久大。九州大学出版会。2003年

- 5) 新・児童心理学講座 対人関係と社会性の発達. 木下芳子. 金子書房. 1992年
- 6) 小学生の生活とこころの発達. 心理科学研究会. 福村出版. 2009年
- 7) 子どもの「10歳の壁」とは何か?—乗り越えるための発達心理学—. 渡辺弥生. 光文社新書. 2011年
- 8) 3歳児の仲間関係の形成過程に関する研究. 松丸英里佳・吉川はる奈. 埼玉大学紀要教育学部, 58(1)、127-135. 2009年
- 9) 4歳児の園生活での仲間関係の発達に関する研究. 松丸英里佳・吉川はる奈. 埼玉大学紀要教育学部, 58(2)、135-143. 2009年
- 10) 小学校高学年児童を対象とした異性への寛容性尺度の作成. 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和. 実験社会心理学研究 第48巻 第1号32-39. 2008年
- 11) 発達障害児における社会的相互作用に関する研究動向—学童期の仲間関係を中心に—. 金彦志・細川徹. 東北大学大学院教育学研究年限 第53集、第2号. 2005年
- 12) 子どもの仲間関係研究の動向と展望. 藤田文. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要、第40巻. 2002年
- 13) 幼稚園の屋内と屋外における様々な遊び場所が仲間との関わりに及ぼす影響. 廣瀬聡弥. 保育学研究、第45巻、第1号. 2007年
- 14) 幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究Ⅲ. 進野智子・小林小夜子. 長崎大学教育学部紀要—教育科学— 第59号、53-68. 2000年
- 15) 異年齢集団活動が児童の発達に関わる可能性. 開浩一・柿森昭長. 現代社会学部紀要、7巻1号、39-46. 2009年
- 16) 小学校3年生に対するソーシャルスキルトレーニングは中学校生活に影響を与えるか? 上村佐知子・佐藤さゆり・浅沼知一・曾山和彦. 秋田大学保健学専攻紀要20(1)、69-73. 2012年
- 17) 個人—集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足度に及ぼす影響. 黒川雅幸・吉田俊和.